

温故知新

若きRheumatologistへの提言

若きリウマチ医の羽ばたき

村澤 章

新潟県立リウマチセンター名誉院長

若きリウマチ医が燃えている。研修医として、研究者として共に働き、お付き合いした彼らの羽ばたきを紹介したい。

・温故知新—リウマチセンターの流れ—

新潟県立リウマチセンターの歴史は、(故)田島達也教授がフィンランドのヘイノラにあるRheumatism Foundation Hospitalを見学しその活動に感動されたことが端緒となった。教授は新潟にもリウマチセンターが必要と力説されて、1981年村上市の新潟県立瀬波病院にリウマチセンターを立ち上げることに尽力された。当時は難治症例が頻発し対応に苦慮したり、さらに新しく開発された生物学的製剤を導入した治療も求められ、2006年さらなる発展を目指して県北から、新潟市に近い新発田市に移転し新潟県立リウマチセンターとして設立された。

・リウマチ研修医(村チル)とともに

リウマチセンターの発展のためにはハード面以外に人事などのソフト面の充実も必要であった。ソフト面の中心はスタッフの確保と教育にある。そのため研修医制度を立ち上げ途切れなく技術と人脈を継続させることに心血を注いできた。現在まで108名が登録され特に後半の新発田でのリウマチセンターでは全国から若きRheumatologistが集い、研修終了後は村澤チルドレンとして活躍されている(写真)。現在県外の46名の先生方が北は北海道から南は沖縄まで広がっていて、それぞれの立場でリウマチ医として研鑽されている。

・若きRheumatologist への提言

名誉は追うな：失礼かもしれないが、賞や名誉は目標にするものではない。後でいくらかもついてくるものではないだろうか。リウ

マチ医の目的はリウマチ患者さんを治療することであり、目標はリウマチ医療を発展させることであろう。

コミュニケーションの輪を広げよう：リウマチ医一人では何もできない。縦に横に蜘蛛の糸を張ってコミュニケーションの輪を広げ、情報の収集、連携の拡大、現システムの継続に繋げたい。

高齢者を大切に：最近リウマチ患者さんの高齢化が話題になっているが、D2TRA(難治症例)の原因の一つでもある。高齢者を大切にする事はリウマチ治療を発展することに直結することが実感される。

すべての患者さんと医療人が一体になったリウマチ医療の世界を広げるために一翼を担って頂きたいと切に願っている。



瀬波・リウマチセンター研修医・研究医
“村チル”(村澤チルドレン)

総勢:108名、新潟県外:46名+α、海外(ドイツ)2名